



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	教職大学院授業報告「校内研修・研究コーディネーターの育成」の授業の充実・改善の取組：現職教員の授業を中心に(fulltext)
Author(s)	寺崎,千秋
Citation	東京学芸大学教職大学院年報, 1: 67-77
Issue Date	2012-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/132040
Publisher	東京学芸大学教職大学院
Rights	

教職大学院授業報告

「校内研修・研究コーディネーターの育成」の授業の充実・改善の取組

—現職教員の授業を中心に—

寺崎 千秋（東京学芸大学教職大学院）

はじめに

本教職大学院の授業では、「学校現場等での実際的な問題解決に資するため、フィールドワーク、ワークショップ、事例研究、ロールプレイングなどアクティブな教育を実施する」ことを方針としている。教員の講義を聞いて学ぶという座学中心ではなく、現職教員院生等がこれまでの教育実践から主体的に課題を見だし、他の院生等と協働して問題解決に当たるとともに、院で学ぶ新たな教育内容や方法を生かしてこれからの学校づくりを創造できる資質・能力などの力量やリーダーシップを育むことを目指している。

これについての筆者の実務経験は、教諭時代に校内研究主任、学年主任の経験、指導主事等時代の学校訪問等での校内研究や研究団体等への指導助言の経験、校長職時代の校内研究等の充実に向けたリーダーシップ発揮の経験などである。したがって、前述の本教職大学院の授業のあり方についての知見や経験は必ずしも十分ではなく、これまでの経験を生かすとともに最新の学問的な成果等を学びながらの授業づくり、充実・改善となった。

一方で、入学してくる現職教員等の本学で学ぼうとする動機や期待、問題意識や課題、求める内容・方法等は多様であり、一人一人の力量もそれぞれに特性が差がある。また、本授業は選択科目であり、希望する者が受けている。それだけにやる気を感じるが、授業への取り組み方には差が見られるのが実態である。

本報告は、以上を踏まえながら「校内研修・研究のコーディネーターの育成」の授業の充実・改善に努めてきたこの5年間の成果や課題について、春学期の現職教員の授業を中心にまとめたものであり、もって更なる授業の充実・改善に資するものとした。

1. 「校内研修・研究のコーディネーターの育成」の授業の概要と授業計画

本授業の概要については、「平成24年度教職大学院履修便覧（教育実践創成専攻）」に以下のように示している。（同便覧67ページ）

現代的な教育課題に適応した校内研修・研究の立案能力と校内研修・研究推進者として同僚性の促進を図り、協働的な実践研究活動を組織し支援する教師を育成する。

具体的には、①先端的な教育方法・授業研究やコミュニケーション・コーチング方法等を調査し、授業実践及び校内研修・研究上の現状と課題を把握する。②各自の実践事例や先進的な校内研修・研究事例を収集・検討しながら、優れた研修・研究校及び推進者が実施しているスキルを解明する。③自分が関与する具体的研修・研究テーマの設定と研究全体構想図の作成を行うとともに、教職員一同が協働的に研修・研究・実践活動を展開していくための方策を提案し、シミュレーションやプレゼンテーション等を通じて検討・評価を行う。

これらは、本授業を通して現職教員院生が学ぶべき目標や内容・方法である。さらに、現職教員にはこうした授業を通して「学校の実態や保護者のニーズを踏まえた研修・研究

主題の設定、研究内容・方法などや、教材開発や学習活動の創意工夫などについて高い専門性をもって、各学校を指導することができる」力量を身につけることが到達目標として示されている（同便覧 67 ページ）。すなわち、近い将来において学校内のみならず地域において、研修・研究の指導のリーダーとなることが期待されているということである。

なお、本授業では校内研修と校内研究を一体的に扱っている。「校内研修」は主として現状の教育課程の実施や学校運営に必要な資質・能力等を身につけるために行うものであり、「校内研究」は教育課程の実施等に新たに生じる課題の解決や、教育課程改訂等で新たに取入れられる教育内容・方法を身につけるために行うものであると考えている。しかしながら、これらは明確には峻別できないので一体的にとらえ表現している。

2. 授業計画の構想と毎時の授業計画

本授業の計画（授業形態）は以下のとおりである（同便覧 67・68 ページ）

授業の内容は、大きく 8 つの主題で構成している。複数時間扱う授業内容は、前段で方法論の理解や協議等、後段で実践と協議などである。

また、現職教員の実態に応じて、これらの扱う順を変えたり、いくつかの主題を関連づけて扱う

ことも行っている。これらは第 1 回のオリエンテーションの際に「授業計画（案）」を提示し、状況によっては順を入れ換えたり弾力的に扱ったりすることを伝えている。

さらに、毎時の授業の際には、A 4 判 1～2 枚の「本時の授業計画」を提示している。主な内容は、○本時の主題、○本時のねらい、○主な活動の内容とその時間、○本時に必要な内容や方法の提示、○次回の予告である。この他に、本時に必要な教材や資料を添付して配布している。

I	教員研修の意義と校内研修・研究（1 時間）
II	教職員の参加意欲と校内研修・研究の運営（2 時間）
III	学校のミッションと校内研修・研究の主題（2 時間）
IV	校内研修・研究の組織運営（2 時間）
V	校内研修・研究の全体計画（3 時間）
VI	校内研修・研究における授業研究の進め方（3 時間）
VII	校内研修・研究を運営する上での阻害要因（1 時間）
VIII	校内研修・研究とキャリア形成（1 時間）

3. 授業改善の取組の内容・方法 — 講義・説明中心の授業からの転換を目指して —

(1) ニーズや実態の把握 — 「はじめに」の作成を通して —

本教職大学院出発の平成 20 年度から 21 年度では、第 1 回目の「教員研修の意義と校内研修」についての講義をオリエンテーションとして行った。しかし、2 年間の授業の振り返りとして、現職教員院生の実態やニーズをきめ細かに把握することの必要性を感じ、22 年度から、授業の第 1 回目のオリエンテーションの際に「はじめに」と題した A 4 判 1 枚のプリントを配布して、「これまでの校内研修・研究の経験を振り返って思うこと」と「本授業に期待すること」を書いてもらうことにした。前者は現職教員院生のこれまでの校内研究等を振り返って思うこと・考えることを把握する、後者は本授業に一人一人が何を期待しているか・求めているかを把握することが目的である。また、現職教員院生は年齢や経験ばかりでなく、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、私立学校といった

校種の違い、東京、埼玉、神奈川、静岡などの地域性、管理職等の専攻試験を通ってきている者等々、実態や現状の違いも大きいので、個々のニーズをしっかりと把握することが大切であると考えたからである。一方、ストレートマスターについては、採用を希望する校種や都道府県等はそれぞれに違っていると同時に、創成研修での校内研修・研究の経験も研修校により差が見られることから、本授業に求めるものが個々により違いがある。

以下は、平成 24 年度の現職教員院生の「本授業に期待すること」の一部である。

- ・ 研究推進委員長として研究を進めるための実践力を身につけたい。
- ・ 授業研究を運営する際の手順を習得したい。
- ・ 若手育成に向けた校内研修のやり方等についていろいろな方法を知りたい。
- ・ 教員のモチベーションを向上させる方法を知りたい。
- ・ 全員が主体的に参加できる研修のあり方。
- ・ 多くの方が当事者意識をもてる研修会にすることが大切であり、その方法を学びたい。
- ・ 研究主任は経験がありませんが、これから学校現場で研究主任やコーディネーターを育成する立場になっていくことになると思うので、必要な心構えを学びたい。
- ・ 高校においては、校内授業研究は定着しておらず、むしろこれからシステムを構築していく必要があります。校内研究の必要性を明らかにし、すでに効果的な実践を行っている学校を参観し、研修の方法を探っていきたい。
- ・ 企画～検討といった一連のプロセスを学び、その際に自身の考える研修・研究への課題を解決するための取組についても行うことができると思う。
- ・ 校内研究に向けてのモチベーション向上策を見いだしていきたいと考えている。手続き的な部分、事例、新しい時代の校内研究のあり方に触れていきたい。
- ・ 私の課題研究のテーマは「全ての教員が授業力を向上できる校内研究のあり方」です。自分が推進する立場として、または指導する立場として多くのことを学びたい。
- ・ 学校経営計画を軸とした校内研修・研究プランの作り方。
- ・ 研究主題の設定の仕方、研究方法、より効果的な協議会のあり方など、理論と実践を学び専門性を身につけたい。
- ・ 校内研究について課題意識をもっていることは、研究の視点、すなわち子供の育成に視点を置くか、教師の授業改善の力に視点を置くかのどちらかで毎年のように研究がぶれてしまうことである。そのあたりのことも授業で触れていただくとありがたい。

以上のように、現職教員院生が現在置かれている立場や校種、自己の校内研修・研究の経験、自身の課題研究との関わりなど、個々のニーズに違いがあることがわかる。このことから、授業の内容・方法の計画に当たって、取り上げる内容の精選や重点化、ワークショップ等の際のグループ編成のあり方などに配慮するようにした。

(2) 個々の現職教員院生の校内研修・研究歴の把握

同じく、平成 22 年度から、第 1 回目の授業と第 2 回目の授業の合間に「校内研修・研究歴」のレポート (A 4 判 1 枚) の作成を課すようにした。その意図は、一つは、これまでに現職教員院生がどのような校内研修・研究の経験を持ち、そこから何を学んでいるかを把握し今後の授業に生かすことである。二つ目には、各院生が自己の校内研修・研究歴を振り返り、校内研修・研究の経験が自己のキャリア形成に重要な意味をもっていること

に気づいてもらうことにある。後者は授業内のグループでのワークショップ等で扱うことにしている。レポートには経年で校内研修・研究のテーマを示し、それに即してその研修・研究で学んだことを列挙する。さらに全体を通して校内研修・研究から学んだことを報告してもらっている。平成22年度のA院生（小学校）は以下のように報告している。

年度	研究主題又は研修主題	研究等で学んだこと
14	みがく・かかわる・みらいを拓く子どもの育成～新教育課程の実施～	・総合的な学習の時間のまとめ方 ・設定した評価基準の整合性の確認
15	同前 ～基礎・基本の徹底～	・理科学習の進め方 ・評価基準の見直し ・算数科指導案作成法
16	同前 ～算数科における指導と評価と援助の一体化～	・即時的評価の具体的場面設定と方法 ・評価基準の整合性の確認
17	同前 ～体育科における指導と評価と援助の一体化～	・体育の授業における声かけの具体例と評価と援助の方法
18	同前 ～コミュニケーション能力育成の指導法の工夫～	・教育課程の編成 ・国語科の「話すこと・聞くこと」を重視した指導案作成法と指導法の工夫
19	同前 ～学力向上を目指した教科担任制への取り組み～	・教科担任制導入に必要な教育課程の編成と体制作り
20	わかる・できる・活用する子どもの育成～教科担任制を中心とした学力向上への取り組み～	・教科担任制を含む効果的な指導体制の追究
21	表現力を高める指導法の工夫～書く活動を通して～	・国語の「書くこと」を重視した指導案作成と指導法の工夫

中学校のB院生は身についたこととして、平成10年度から各年度ごとに、「支援の可能性、授業設計」「ネットワーク活用法、継続的な環境把握」「地域教材の活用法、理科授業の応用」「校務処理の効率化、PCの有効活用」「わかる授業づくり、評価基準の活用」「勤労観・職業観の育成」「コミュニケーション能力の育成」「特別支援教育・個に応じた教育」「授業設計のあり方」などを上げている。

このように、個々の現職教員が校内研修・研究で多様な資質・能力等を身につけていることを自覚し認識していることがわかる。校内研修・研究が個々の教員のキャリア形成に重要な役割を果たしていることがわかるとともに、これらの経験を授業の中で生かされるようにするため、グループでのワークショップや協議を多く取り入れるようにしている。

（3）問題解決型の授業構成への転換 — 阻害要因の析出からの出発 —

本授業の平成20年度（第1年次）の計画では「校内研修を運営する上での阻害要因」に関する授業は第14・15回目に行うことになっていた。第14回は阻害要因の析出と解決方法の提言、第15回は阻害要因を排除するための方策の組織マネジメントの視点からの理解等である。これらは、13回目までの授業での整理・まとめが趣旨であった。しかし、実際の授業場面では、第2回目以降の授業において当初から教員のやる気のなさや予

算不足、管理職リーダーシップの不足などの阻害要因に関わる諸問題が出されていた。

そこで、これも平成 22 年度から第 2 回目に本授業を先行させ、そこで出された校内研修・研究運営上の阻害要因の解決を以後の授業で取り上げるようにした。

第 2 回の授業の概要は以下のとおりである。

- 1 校内研修・研究運営上の阻害要因となったことを各自小カードに書く。
- 2 書かれた内容をグループ内で整理し A 3 判用紙にまとめる。
- 3 代表が発表し、全員で質疑を行い、阻害要因について共通理解する。

以下は、書くグループでまとめた阻害要因である。(○印は最大の要因と考えるもの)

Aグループ	Bグループ
<ul style="list-style-type: none">・授業者・講師について (予算、指導等)・協議会の雰囲気 (協力体制)○研究・研修への意欲・研究の形にこだわる風潮・時数、行事 (教務関係)・保護者・地域の理解	<ul style="list-style-type: none">○研修をやりたがらない (中学・高校)・児童・生徒のせいにする・できる人に集中・管理職からの強制・理屈を学んでも・・・・意欲の低下・方向性が不明確
Cグループ	Dグループ
<ul style="list-style-type: none">○校内研究における目的テーマが共通理解されない・成果や課題が全体に落ちていかない・ベテランの教師の意識 (公開しないこと)・教職員同士のチームワーク・やる気のない人の存在 (発言強し)・時間の確保	<ul style="list-style-type: none">○意欲 (やる気)・授業をやる人とやらない人・若手教員の増加・時間・予算 (講師)・研究内容 (マンネリ)・管理職の理解

これで見ると、「研修・研究への意欲」が阻害要因の中でもっとも重要な要因として上げられている。そこで、「研修意欲を高めるための方策・マネジメント」を次の第 3 回で扱うようにし、他の要因については指導計画の関連内容に位置づけて問題解決を扱うようにし、問題の設定とその解決に向けたプロセスとなるよう計画した授業を行った。

なお、ストレートマスターの場合は経験が少ないので、指導計画どおり最後のまとめの段階で取り扱うようにしている。

次に、平成 23 年度では、各グループから出された内容項目についてその重要度を全員で評価し、主なものについて書くグループごとにテーマを決めてその解決策を提案する展開にした。阻害要因の解決策の策定により主体的に取り組み、問題を掘り下げて思考を深めたいと考えたからである。設定した 4 グループは以下の 4 点を取り上げ、その解決方策を協議し提案して、それを全体で質疑・協議を行った。

<Aグループ>教員の研修意欲の向上策について

- ・1年間の研究計画にそって「足を引っ張る教員」「ベテラン教員」「授業を見せたくない教員」の研修意欲向上策を提言する

<Bグループ>研究協議会の充実策について

- ・発言量、司会の工夫、協議会前の準備、講師との連携について工夫を提案する。

<Cグループ>研究の協働化等の解決策について

- ・「研究を協働的に進められる校長度チェック」表を作成して他グループに作業させ結果について協議する。

<Dグループ>研究推進の円滑化等の解決策について

- ・「私が出合った〇〇な発表会」をグループごとに話し合い発表させる。
- ・その後3年計画の研究推進について提案する

以上の授業においては、校内研修・研究の充実改善のための課題設定やその解決策の協議に際して、グループ別のワークショップを多く取り入れている。ポストイットを活用したKJ法的手法を取り入れ、ブレインストーミングを行い、思考を広げ、その後に整理集約して考えをまとめるようにしている。意外なことにこうした作業を校内研修・研究等で経験していない現職教員がけっこういて、新鮮な気持ちで取り組んでいる姿が印象に残る。

(4) 学校の校内研究への参加

本授業では「校内研修における授業研究の進め方」において、事前に校内研究や発表会に参加することを求めている。しかし、校内研究の取組については、小学校ではほとんどの学校が月例会方式等で学校運営に位置づけ定期的実施しているが、中学校や高等学校等では必要性を感じているが必ずしも取組は十分でない例が多い。(これは平成22年度から提出してもらった「校内研究・研修歴とそこで身につけたこと」のレポートを読むと明らかであった)また、小学校においても所属する学校において差があるのが実態である。

そこで、実際の校内研究の状況を参観して、そこから校内研究運営の工夫や努力、成果や課題を学ぶ授業を取り入れることにした。とはいえ、本大学院の他の授業があることから日程をとるのが厳しかったことから実施日を複数を設定し、選択するようにした。

校内研究会を参観する学校は筆者が講師でいく学校に依頼した。

当日は公開授業を参観し授業記録をとる。協議会には、その学校のやり方で参加したり協議の様子を参観したりする。その後、筆者の指導助言や講話を聞いて、その内容と公開授業・研究協議会の運営や内容等についての自己の感想・意見と比較する。以上の事項についてA4判一枚のレポートを提出する。

大学院での次の授業では、各自のレポートをもとに参観した校内研究会のよさや課題について、グループに別れて話し合い、改善点についてグループの提案をまとめる。それについて、全体に報告して質疑・協議を行いそれらを今後の参考にするようにしている。

春学期の現職教員の場合は1回のみしか時間が取れなかったが、ストレートマスターの場合は「授業研究の進め方」で2回、「研究協議会の進め方」で1回、「研究発表の運営・研究紀要の作成」で1回、計4回を学校に出て実際の場で演習的に行うようにした。自分の研修校以外の校内研究等を参観できることが大変な刺激になったようである。

(5) 校内研修の新しい取組・優れた実践に学ぶ ―講師の招聘を通して―

本教職大学院においても外部講師の招聘が可能であり、本授業においても平成 23 年度から取り入れている。本授業の場合は、本教職大学院で学んだ現職教員の課題研究が校内研修で活用できる事例を取り入れている。校内研究の参観は筆者が依頼される学校への参観で応じることができるが、校内研修はほとんど学校の計画と授業の予定が合わないことから、これまでは紙上での学習で行ってきた。しかし、本大学院の課題研究の事例が増えるにしたがって、校内研修に取り入れられる課題研究の成果が蓄積されるようになってきたことから、これを活用することを考えたわけである。以下はその例である。

【平成 23 年度秋学期】ストレートマスター対象

○研修主題 「若手教員の授業力向上を目的とした教師の連携・相互理解のあり方 ― 中学校における学年内連携を通して ―」

講 師 八王子市立第一中学校 上野和広主任教諭(現八王子市教育委員会指導主事)
内 容 ワークショップ方式による研修の内容・方法の実践説明
質疑・応答

【平成 24 年度春学期】現職教員対象

○研修主題 「総合的な学習の時間の指導計画作成の内容・方法に関する研修の進め方」

講 師 杉並区立杉並第八小学校 畝尾宏明主幹教諭
内 容 ワークショップ方式による総合的な学習の時間の指導計画作成の進め方と配慮事項

○研修主題 「伸長期の教員の OJT の工夫 ― アクションラーニングを取り入れて ―」

講 師 練馬区立豊玉南小学校 吉田松寿主任教諭
内 容 アクションラーニングの進め方と実際(グループによるワークショップ)

以上の 3 名の講師には、それぞれの指導時間枠を設定し、その時間内を自身の計画で進めてもらった。内容は、何れも本大学院での課題研究でまとめたものであり、その内容を十分に把握しているので安心して任せることができる。今後もこうした課題研究の成果を活用することが期待できよう。

(6) 校内研修・研究の研究構想図・全体計画の作成―課題研究との連携も意識して―

本授業計画では、「校内研修・研究の全体計画の作成」が計画の中盤に位置づけられている。しかし、その内容は全体計画であることから、本授業の内容を一通り学んだ後に扱うことが適切であること明らかになり、これを最終段階に位置づけることにした。一方、校内研究の内容や方法が不確定な 5 月ごろの時期に、研究内容・方法等の構想を立てることが校内研究の方向づけをし、歩みを確かなものにする上で欠かせないこともこれまでの経験からわかっている。そこで、校内研修・研究の全体計画の一貫として、「研究構想図の作成」を取り入れることにした。その際、研究主題、研究内容・方法の事例として各院生の課題研究を活用することにした。5 月中旬ごろは課題研究の進め方で迷う時期であり、自分の問題として切実に構想図を作成することが効果的であると考えたからである。方法としては構想図の作成を行い、内容としては各自の課題研究を生かすわけである。その内容は以下のとおりである。(詳細は「課題研究ハンドブック」)

- ア 研究の背景：主題を絞り込むに当たっての社会や教育における背景や問題状況
- イ 主題設定の理由：アを踏まえた主題設定の直接的な理由（実現・解決すべき課題）
- ウ A 研究主題 — 課題研究の主題 — 推移 — 確定
- エ B 研究の中核的な課題 — 何を解明あるいは実現し提案したいのか
- オ C 具体的研究課題 — いくつかの内容や時期に区分する
- カ D 研究方法 — 具体的研究課題を解明する研究方法の工夫・確定
- キ E 具体的研究項目 — 課題の具体化 — 具体的に何をするか
 研究方法に即して一つひとつ解明 —> 小論文化 —> 蓄積 —> 本論文へ
- ク 成果物の活用・提言 — 誰に、何を、どのような形で

以上をA3判用紙1枚の図にまとめる（例参照）。研究構想図案の作成に当たって配慮すべき事項は以下のとおりである。

- 可能な限り具体的に表現する
- A～Eの関連を考慮する
- 3月の報告会（校内研究のまとめ・報告）に向けて、逆上って見通しを立てる。
- 研究成果物をどのようなものにするかを考えておく（過去の例を参考にする）
- Ⅰの研究構想や文献研究などにどこで区切りをつけ、Ⅱ、Ⅲにつなげるか — 決断
- Ⅱ、Ⅲの授業研究、事例研究、調査研究などの実践的な研究の内容や進め方の工夫
- Ⅳの研究のまとめにいつごろから入るか — 先延ばししない
- 研究推進（Ⅱ、Ⅲ）について連携協力校等との連携の仕方を早めに決めておく
- 気になることや課題を余白に書いておく

こうして自己の課題研究を素材にして構想図を作成し他の院生に説明し質疑を行うようにした。以下は授業後の感想の一例である。

- ・漠然と感じていた年間の計画が、構想図にすることによってよく見えてきた。図に表すと、この時期がきつそうだとか、ここまでこのデータが必要だとか、まだ不確定だが感じられるようになった。現段階では、先行研究や概念の獲得を優先して行っていかなければならないと感じた。
- ・構想図を書くことによって研究テーマの全体的な流れを見通すことができた。しかし仮説がまだ定まっていない状況なので、どの時期に何をすればよいのかなど、現時点で不明確な点のはっきり見えてきたことが今回の大きな成果だと思う。この構想図を原点として課題研究を進めていきたい。
- ・何を、いつまでに、どのように研究を進めていけばゴールにたどりつくのかという見通しがもてた。また、班で話し合う中で、自分が不安に思っていたことや、課題に感じていたことが解消されていくことができたのがとてもよかった。

授業の最終段階でまとめる校内研究の全体計画は、以上の構想図に研究組織や研究計画、教育委員会や大学等との関連、研究発表や研究紀要の作成などの要素も入れた総合的な計画として作成する。その際のテーマは校内研修・研究のテーマであり、今日の教育課題の解決を目指すものとしている。次ページに「研究の構想図」と「研究の全体計画」の例を示す。（平成23年度現職教員院生の例）

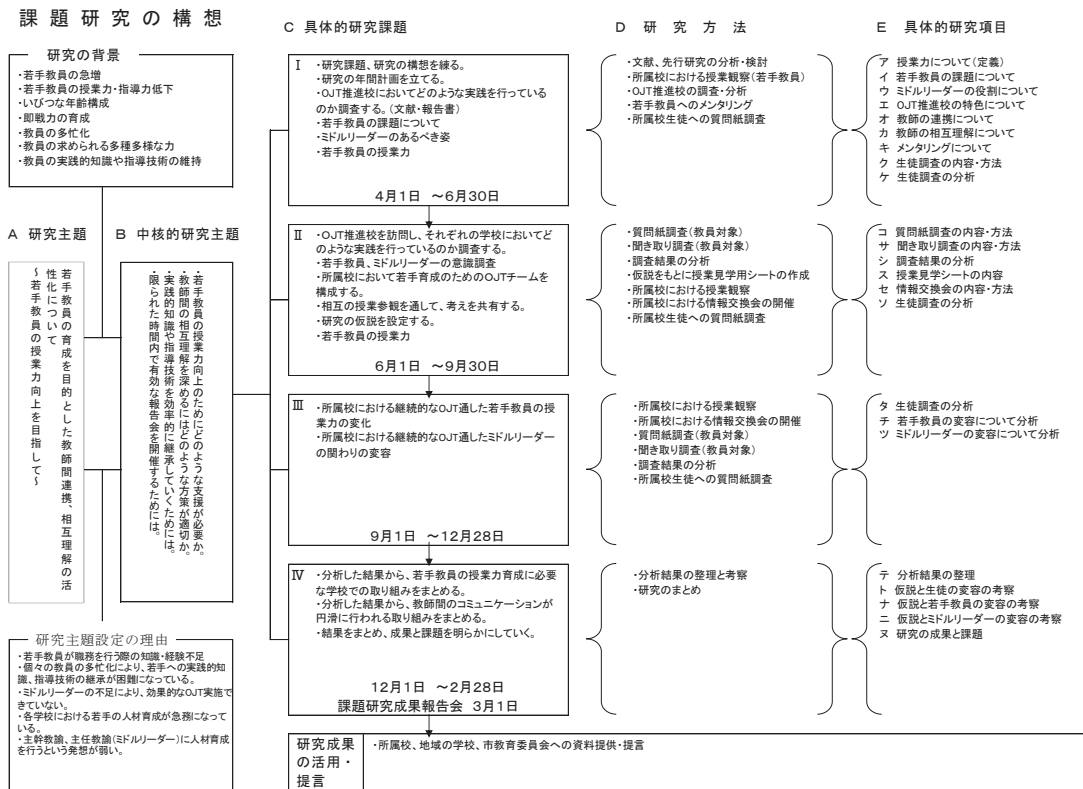
(7) その他の工夫について

(i) ストレートマスターの授業への現職教員の参加

大学院の授業評価及や私的に行っている中間評価の際にストレートマスターから現職教員から学びたいという要望が出された。時間的な都合がつかないことから、春学期の現職教員院生がワークショップや協議等でまとめた作品を教材にし、自分たちのまとめと比較して協議するなどを取り入れた。今後は予定を早めに連絡して参加できるようにしたい。

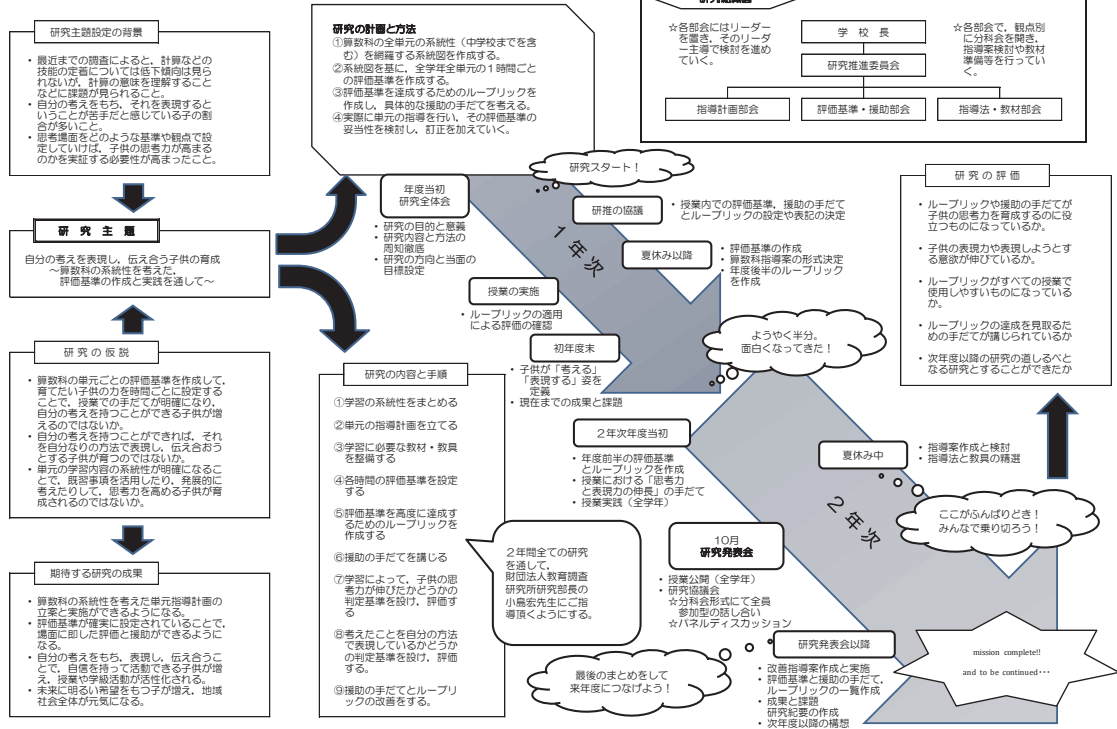
(ii) 一問一答式の問答法による実務経験の活用

授業時間を効果的に活用するために、授業の主題によって平成24年度から導入した。研究発表会の開催や研究紀要の作成について、基本的な事柄を各項目A3半ページにまとめ、それに関する現実の課題や困難等について質問を一人一題カードに書いて提出する。それについて筆者が実務経験をもとに答え、さらに質疑を繰り返す手法である。主題についての具体的な問題・課題に答えるので関心は高いようである。



【事例】研究の構想図

M10-5515 博田 学



【事例】研究の全体計画

4. 授業評価の活用

授業評価については、教職大学院で学期末に実施する「学生による授業評価」と、本授業計画の8回目に行く自主的な「中間の授業評価」及び最終授業の際に記述してもらう「あとがき」の内容を参考にしている。ここでは後者について述べる。

(1) 中間の授業評価から

毎時間の授業内容を示し、「十分に満足している、だいたい満足している、ややもの足りない、期待はずれである」の4段階で評価してもらうとともに、「これまでの授業の感想や意見」を自由記述で書いてもらっている。これらは点数化して返すとともに、自由記述についても全てをプリントして公開し、必要に応じて授業内で返答している。

結果について詳しく報告する紙幅がないが、グループでワークショップ等を行ったり、協議したりなどして自分たちで問題解決した授業は平均して満足度は高くなっている。反対に、教師側の説明が多かったり、授業の内容が深まらなかったりした授業は、ほぼ平均的な結果となっている。毎回の反省点であり以後に生かすようにしている。

自由記述では、平成24年度の場合、校内研修・研究運営上の阻害要因及びその解決策について、「阻害要因の解決策の発表は、どのグループも詰めが甘いと感じた。もうひとひねり（工夫）が必要」「より本質的な授業研究ができるような視点での取組を授業で扱ってほしい」などが出されていた。また、一方で実務家教員としての経験をもっと聞きたいという声が毎年出される。これらについてのバランスをとりながら、授業の質を高めていくことが求められる。

(2) 総括評価としての「あとがき」の活用

22 年度春学期から最終授業で「あとがき ― 授業の成果と今後に向けて ―」を記述してもらった。いずれも「校内研究の充実に向けて授業での学習を生かしたい」「研究主任として活躍したい」「校内研修・研究への意欲と希望がもてた」「授業内容を現研究主任に伝えたい」「研究を学校改善につなげたい」「校内研の交通整理ができるような存在を目指し頑張っていきたい」「ファシリテーションなどの考え方などを知り組織の一員として新しい視点を得ることができた」「校内研修・研究の意義を深く考えることができた」などの声が出されていた。一応の成果として受け止めている。

一方、「一つの発表について、徹底的に討議し合う時間があってもよい」という要望もあった。質を深めていくためには、問いを繰り返し掘り下げていくことが必要である。これを 15 回の授業計画にどう位置づけていくか、院生のニーズとも絡ませながら考慮し実現していくことが必要であると考えた。

おわりに

以上のように、本大学院の授業の趣旨である協働によるアクティブな学びを取り入れ、授業改善に努めてきたが、更なる質の高い授業を目指す必要があると振り返っている。

「学び続ける教員像の確立」が中央教育審議会で提言されている。校内研修・研究は学び続ける教師を育てる場であり、教師の力量を高める場である。また、学校はこれからの時代を担うためのイノベーションが求められ、それを自覚し研修していく場ともなろう。それらに応えられるよう、本授業の内容・方法や計画をさらに充実・改善させていきたい。